

1 単元名 「物語のみりょく紹介カードをつくり、伝え合おう」—『雪わたり』—

2 単元について

(1) 単元の概要

学習指導要領では、次のような位置づけになっている。

【第5学年及び第6学年】

1 「知識及び技能」の指導事項

(1) ク 比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと。

2 「思考力、判断力、表現力等」の指導事項

C 読むこと

(1) エ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。
カ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。

本単元では、『雪わたり』を読み、異世界での紺三郎との関わりを通して、人間である四郎とかん子
が変容していく様子を読み取り、作品にこめられた作者の思いや、比喩や反復などの優れた表現を味
わひ、物語の魅力を紹介するという活動を設定した。

『雪わたり』は、宮沢賢治によるファンタジー作品である。雪がすっかりこおった日に、四郎と妹
のかん子は森で白い子ぎつねの紺三郎に出会う。はじめは紺三郎に不信感を抱いていた四郎とかん子
だったが、森の中での楽しいやり取りを通じて、紺三郎と徐々に打ち解け、幻灯会に誘われる。11 歳
までの子どもしか参加することができないという、ぎつねたちの幻灯会で、四郎とかん子はぎつねの
こしらえたもちをたいらげる。このことから、ぎつねたちは人間に信じてもらえたと大喜びし、四郎
とかん子もまたその姿に感動して、うれし涙をこぼすという内容のストーリーである。物語は、中心
人物である四郎の目線から語り進められていく。紺三郎は何のために、二人を幻灯会に招待したのか
や、なぜ 12 歳以上の兄たちが幻灯会に参加することを断ったのかなど、紺三郎側の目線が明確に書か
れていないため、本文の叙述から丁寧に読み解いていく必要がある。そのために、本単元では、ぎつ
ねに対する 2 人の気持ちの変化を読み解くことで山場を見つけたり、その山場を手がかりにして、作
者が伝えたかった思いについて考えたりすることで、子どもたちを作品の主題に迫らせたい。本作品
は、1921 年から 1923 年にかけて雑誌に掲載された童話である。掲載時から 100 年もの年月が経過し
ているため、言葉の変化も少なくない。例えば、本文に登場する「あんまり」や「ぜんたい」、「まる
で」などは現在の用法とは異なる意味で使われている。こうした言葉の違和感に着目していくことで、
自分が普段使う用法と比較して考える意識をもたせたい。また、本作品では直喩や暗喩などの比喩表
現が多用されていることで、より『雪わたり』の世界観を美しいものとして描く効果があることを子
どもたちに感じ取らせたい。そのために、本文中の比喩表現に着目する際、比喩表現を使わなかつた
ときとの差異から、比喩を使うことの効果を感じ取らせたい。そして、子どもたちが今後出会う物語
文の中で、進んで比喩表現を見つけ、そのよさを味わうことのできるような力を身につけさせたい。

第 1 次では、登場人物同士の関係をおさえ、物語の設定やできごとについて読む。中心人物の気持
ちの変化を捉えて山場を見つけ、学習の見通しをもたせる。

第 2 次では、本文の比喩表現や反復表現に着目し、それらが作品に与えている効果について考える。
また、見つけた山場を手がかりとして、作者が『雪わたり』を通じて伝えたかったことを考え、主題
に迫る。

第 3 次では、第 2 次で捉えた物語における表現の工夫や、主題など、テーマを絞って「『雪わたり』

のみりよく紹介カード」を書くという言語活動を設定する。物語を通じて自分が最も魅力を感じたテーマについて紹介文を書き、作り上げた紹介文を友達と共有することで、同じ作品で、異なる紹介文に触れるおもしろさを感じ取らせたい。

(2) 単元の観点別目標

知識及び技能：物語の中の比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。

思考・判断・表現：人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。また、文章を読んでまとめた意見や、感想を共有し、自分の考えを広げることができる。

学びに向かう力・人間性等：進んで物語の中の比喩や反復などの表現について考えたり、登場人物の心情の変化や、主題について考えたりし、共有しようとしている。

3 研究仮説との関連

仮説1 「目的意識」をもたせる単元構成や、習得した知識・技能を活用して課題を解決する学習活動を取り入れることで、21世紀を生き抜く力を高めることができるだろう。

- ① 自ら読む力を高めるために、「国語のたからもの」を活用して読み方を具体的実践で指導する。本単元では、既習の学習用語をふまえた上で、高学年での学習内容にあたる「山場」「ファンタジーの入口、出口」「比喩」などの学習用語（国語のたからもの）の意味を丁寧におさえて学習をすすめていく。

仮説2 伝え合い活動を効果的に取り入れることで、21世紀を生き抜く力を育てることができるだろう。

- ④ 考えを広げたり深めたりできるような伝え合い活動を授業の中に設定する。考えを外言化して、友達の考えと比べて広めたり深めたりできるよう、自分の考えを文字や言葉にすることで、友達に伝え合う場を設ける。

4 指導計画（全10時間扱い）

次	時	学習のねらい	児童の学習内容と評価
第1次	1 2	・「雪わたり」の読み聞かせを聞いたり、着語読みを行ったりすることで、物語の概要をつかむことができる。	・着語読みを行う中で、文脈をふまえた上で分からない語句を調べ、物語の概要をつかむ。 ・その一、その二の出来事を大まかにつかむことで話の流れを理解する。 評 物語に興味をもって語句を調べたり、出来事を大まかにまとめたりすることで、物語の概要をつかもうとしている。 【態】（ノート、発言）
	3	・物語の構造を捉え、物語のあらすじをかくことができる。	・物語の流れを大まかにまとめたノートを参考に、重要な出来事は何かを確認したうえで、ミニマルストーリーをかく。 評 物語の構造を捉えたうえで、ミニマルストーリーを書くことができる。 【思】（ノート、発言）
	4	・「雪わたり」を精読し、印象に残った点について共有することができる。	・「雪わたり」の内容を捉えたうえで、どんなところが印象に残ったかについてノートに書き、友達と意見を共有する。 評 叙述に基づいて印象点を書き出し、友達と共有することができる。 【思】（ノート、発言）

第2次	⑤ 本時	・中心人物の心情の変化を読み取り、物語の山場について考えることができる。	・本文に根拠をもちながら、中心人物である四郎の心情の変化に着目して、物語の山場を1文で探し出す。 評 叙述に基づいて、中心人物の心情の変化に着目することで、物語の山場を考えることができる。 【思】(ノート, 発言)
	6	・雪わたりの表現の工夫に着目し、その効果について考えることができる。	・比喻や反復、色彩などの表現で工夫されていると感じたものをノートに書き出し、選んだ表現の効果について考える。 評 表現の工夫に着目し、その効果について考えることができる。 【知】【思】(ノート, 発言)
	7	・山場を参考に、「雪わたり」という作品を通して自分が受け取ったメッセージについて考えることができる。	・山場を参考に、自分が雪わたりでどのようなメッセージを受け取ったかを書き出し、友達と意見を共有する。 評 山場を参考にして、物語から受け取ったメッセージをノートに書き、伝え合うことができる。 【思】(ノート, 発言)
	8	・「雪わたり」の魅力を紹介するうえで、自分が魅力として伝えるテーマを設定することができる。	・学習してきたことを生かして、比喻や反復表現、山場のおもしろさ等からひとつ選び、どのテーマでみりよく紹介するかを考え、ノートに紹介文をまとめる。 評 「雪わたり」を紹介するうえで、自分が最も魅力だと感じたものを選び、ノートにまとめることができる。 【思】(ノート, 発言)
第3次	9	・前時に自分が設定したテーマで魅力を伝える紹介文を書くことができる。	・前時に設定した「雪わたり」のみりよくについて、紹介する文のみりよく紹介カードに書く。 評 自分が設定したテーマでみりよく紹介カードを書くことができる。 【思】(カード, 発言)
	10	・前時に作成した魅力み紹介文を友達と伝え合い、学習を振り返ることができる。	・作成したみりよく紹介カードを友達と紹介しあい、同じ物語でもみりよく感じるところは人それぞれであるところにおもしろさを感じる。 評 作成したみりよく紹介カードを友達と紹介しあい、学習を振り返ることができる。 【思】(カード, 発言)

5 本時の指導 (5/10)

(1) 目標

中心人物の心情の変化に着目することで、物語の山場を考えることができる。

(2) 仮説との関連

仮説1 「目的意識」をもたせる単元構成や、習得した知識・技能を活用して課題を解決する学習活動を取り入れることで、21世紀を生き抜く力を高めることができるだろう。

- ① 自ら読む力を高めるために、「国語のたからもの」を活用して読み方を具体的実践で指導する。
本時では、中心人物である四郎の心情の変化に焦点をあてて、物語の山場を見つけることをめあてとする。その中で、「中心人物」「山場」などの学習用語(国語のたからもの)を丁寧におさえて学習を進めていく。

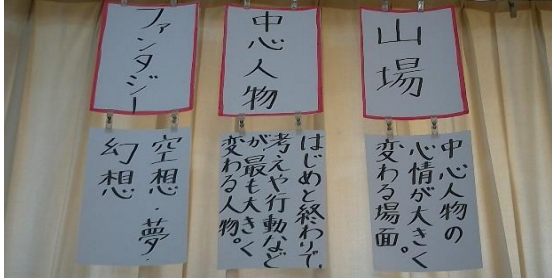

仮説2 伝え合い活動を効果的に取り入れることで、21世紀を生き抜く力を育てることができるだろう。

- ④ 考えを広げたり深めたりできるような伝え合い活動を授業の中に設定する。

自分で考えた山場について、ノートに選んだ理由を書き、友達と伝え合うことで、同じ場所を選んでいても、別の場所を選んでいても考えを比較して深めることができる。視覚的にも全体で共有しやすいように、短冊に書き記して黑板に提示する。

(3) 展開

◎印は、仮説との関連
評(評価) 手(手立て)

学習内容	授業の実際と考察 実際の児童の様子	時配 ()は実際にかかった時間
<p>1 本時のめあてをもつ。 「雪わたり」の山場を見つけよう。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・中心人物の心情が変わったところが、山場であるということを確認した。 ・中心人物は、気持ちが大きく変わる登場人物だから、四郎とかん子だ。 ・紺三郎に対して、はじめは警戒している様子だったが、最後には紺三郎を信用する気持ちに変化している。 ・四郎の心情の変化を全体で確認し、変容したとわかる箇所が山場であることをおさえた。 	<p>5 (14)</p>
<p>2 山場だと思う1文を探してノートに理由を書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『ね。食べよう。お食べよ。ぼくは、紺三郎さんがぼくらをだますなんて思わないよ。』 →はじめは紺三郎を疑っていたのに、きびだんごを食べようと決心しているから。 ・「そして2人は、きびだんごをみんな食べました。」 →決心してきびだんごを食べたところだから。 ・「四郎もかん子も、あんまりうれしくて、なみだがこぼれました。」 →ばかにしたり、警戒したりしていたきつねに感動して涙がこぼれたから、心情が変化したと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・山場だと考えた教科書本文の1文に線を引き、ノートに理由を書くように伝えた。 ・「大造じいさんとがん」の山場の学習をしたときに、どのようにして山場を見つけたのかを想起できるように、「大造じいさんとがん」の学習で使用した掲示物を使って確認した。  <ul style="list-style-type: none"> ・「そいじゃ、きつねが人をだますなんてうそかしら。」 →紺三郎が四郎を説得して、四郎がきつねに対する気持ちが変わってきたところだから。 ・「ね。食べよう。お食べよ。紺三郎さ 	<p>12 (16)</p>



3 選んだ山場について、班の友達と伝え合う。



4 全体で共有する。



5 学習の振り返りを行う。

んがぼくらをだますなんて思わないよ。」

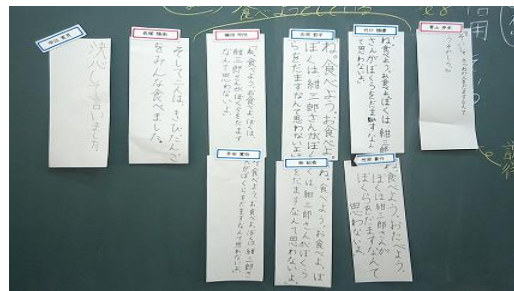
→「うさのくそ」だと思っていた、きつねたちがこしらえただんごを食べようと決心したところだから。

・「そして二人は、きびだんごをみんな食べました。」

→決心してきびだんごを全部食べたのがわかるところだから。

◎自分が選んだ箇所とその理由を、4人組の班の友達と伝え合う場を設けた。
 ・全体で共有するために、班で選ばれた山場の候補を短冊に書くように促した。

13
(12)



・黒板に掲示した短冊を参考に、全体で山場を探った。

10
(3)

評 中心人物の心情の変化に着目することで、物語の山場を考えることができる。 【思】(ノート・発言)

手 山場を考えるのが難しい児童には、四郎の気持ちが変わったことをもう一度教科書で確認したり、班の友達の考えをヒントにしたりするよう伝えた。

・山場を探すという学習のなかで、自分の意見が深まったことや、友達の考えに触れて考えたことなどを中心として振り返るよう伝える。

5
(0)

時間が足りずに、全体でのまとめと振り返りを行うことができなかった。

(4) 板書



6 本単元の成果 (○) と課題 (●)

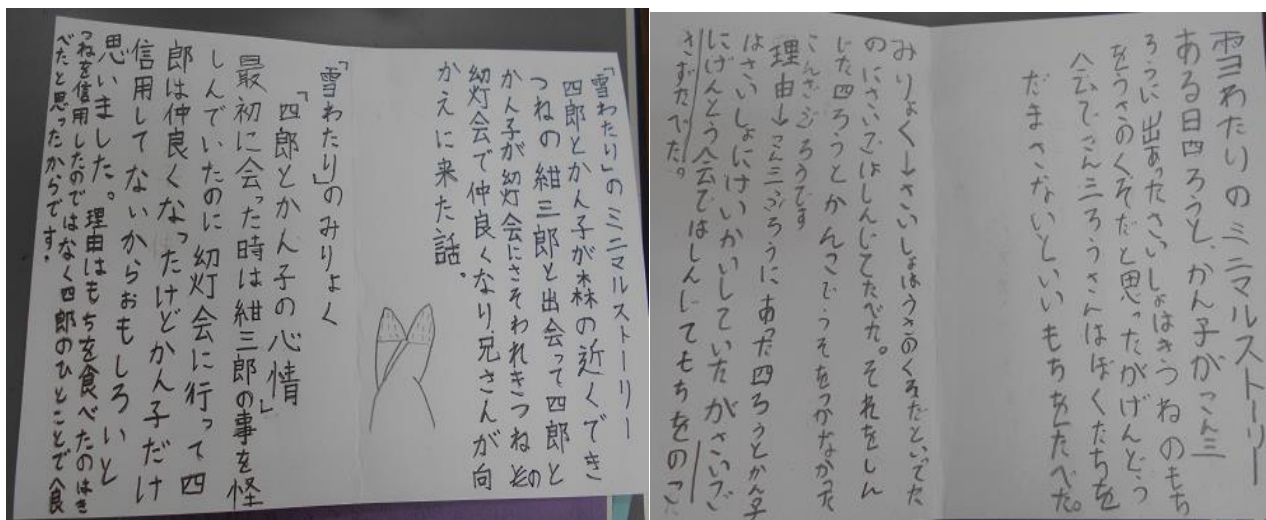
仮説1 「目的意識」をもたせる単元構成や、習得した知識・技能を活用して課題を解決する学習活動を取り入れることで、21世紀を生き抜く力を高めることができるだろう。

- ① 自ら読む力を高めるために、「国語のたからもの」を活用して読み方を具体的実践で指導する。
- 「いつか、大切なところ」や「大造じいさんとがん」の学習で山場を考えることを積み重ねてきた。その経験を生かして、山場は中心人物の気持ちが大きく変化するところであるという共通理解のもとで、根拠をもって山場を探ることができていた。
- 既習の学習用語として振り返りやすいように「国語のたからもの」の掲示をしたことで、学習用語の意味を丁寧に捉えながら学習することができた。
- 「山場を見つける」という学習が、作業的になってしまった。物語を読み深めていく中で楽しんで山場を見つけられるように、発問を工夫するべきだった。
- 前時までの学習で、登場人物の心情についての読みが浅かったため、導入部分で多くの時間を割いてしまい、山場を全体で共有していくことに重点を置けなかった。次時に山場を見つけるという見通しをもった上で、中心人物が誰であり、始めと終わりでどのように心情が変化したのかをおさえておくべきだった。

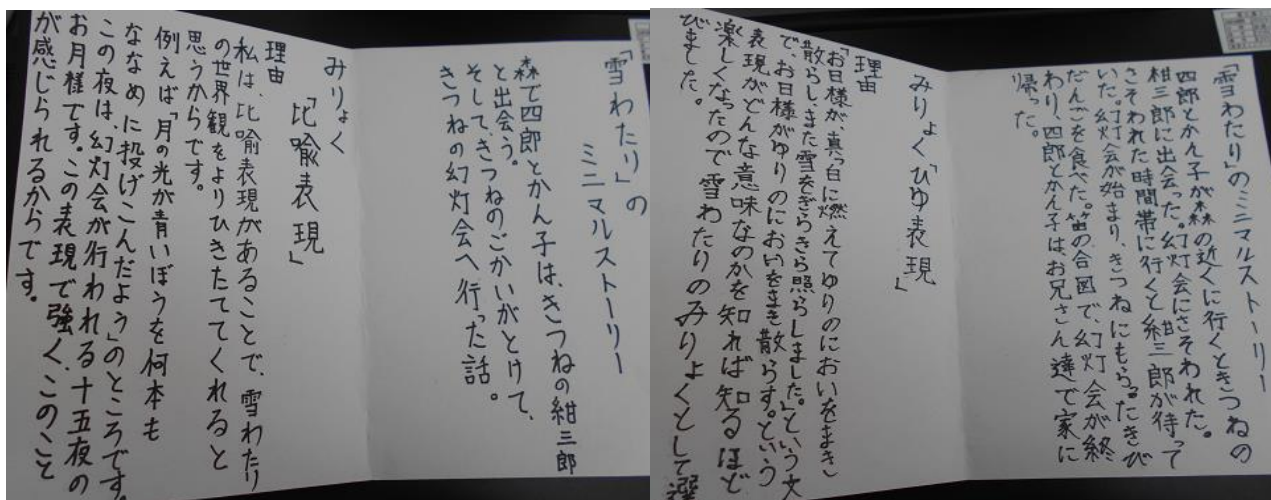
仮説2 伝え合い活動を効果的に取り入れることで、21世紀を生き抜く力を育てることができるだろう。

- ④ 考えを広げたり深めたりできるような伝え合い活動を授業の中に設定する。
- ノートに自分の考えを書かせたり、班での話し合いを経たりしたことで、山場について全員が考えをもつことができた。
- 短冊というツールを用いることで、それぞれが見つけた問いを分かりやすく可視化することができた。また、物語に出てきた順に並べ替えることで、物語の山場の始まりはどこで、どの場面がクライマックスなのかを捉えることができた。

- 短冊を書いて考えを伝え合うという活動は、本単元以前では行っておらず、経験不足であったため、戸惑っている児童が複数いた。また、班で選んだ場面が異なる場合、複数の短冊に記入してもよいという指示が通っておらず、1つに絞るのに苦労している班も見受けられた。指示の仕方を工夫する必要があると感じた。



(魅力を、「心情の変化」にした児童の作品)



(魅力を、「比喩表現」にした児童の作品)